
右手から雷を出そうとしたら異世界にトリップした

そらっち

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右手から雷を出そうとしたら異世界にトロツプした

【Zマーク】

Z0836Y

【作者名】

そらつち

【あらすじ】

彼の何が気に入らないか問われれば、まず第一に“擬態”が恐ろしく下手なこと。歪んだ人間が擬態せず溶け込めるほど、この世界を席捲する“空氣”は優しくない。

第一にそれらについて何ら関心を示そとしないこと。それが私をひどく苛立たせ、第三に当たる、彼の前で私の擬態が剥がれてしまうことに繋がる。

まったく、もう少しでいいから空氣を読んでほしい。それとも、彼はこう思つてこゐるのか？『この世界のほうこそ、自分が居るべき

世界ではない』と。

なんて痛々しい。そんな願いはファンタジーだ。幻想の類は心の中で押しとどめておくべきだ。

……なんて思つていたのに、悲しいかな、この物語は剣と魔法が蔓延るファンタジーな御話だつた。いま、私は彼と連れ立つて異世界を旅している。あと少しで中学一年の夏休みを謳歌できる、といったところで、私たちはこの世界に迷い込んでしまつた。私の人生の歯車はいつたいどこで狂つてしまつたのだろう？ 彼曰く、『ごめん、右手から雷を出そうとした』だそうだ。意味わからん。

* * * 習作として書き始めました。遅筆ですが、お付き合いで頂けると幸いです。また、割と頻繁に大幅な改訂を行いますので、物語が遅々として進まないこともありますが、ご容赦頂けると幸いです。

byそらっち

魔法が使える世界。

そんな世界が存在するのだから、きっとこんな光景が生み出されたことも、それは不思議でも何でもないのだろう。

走りながらそんな思考に気を取られた少年は、しかし、付近で起きた爆発によつて、頭の中を瞬く間に危機感へと塗り替えられた。ついでに泣きたい気持ちも附加された。

喉の奥から飛び出しそうになつた悲鳴を、寸でのところで堪え、少年は疾走し続ける。

再び、近くで爆発が起つた。10メートル程手前の地面に魔法が着弾したためだ。爆風とそれに乗つてやつてくる塵に怯みながら、それでも彼は足を止めなかつた。止める間もなかつた。

通り過ぎざま、着弾地点に目を遣ると、その部分だけ直径50センチ程の陥没が形成され、褐色の地肌を覗かせていた。その様は少年に嫌でも最悪の想像を喚起させる。

頬を引きつらせ、膝下10センチ程の高さで生え茂る草花に、足を取られまいと、重くなつた両腿を必死に上げ下げした。動悸は激しく、それは彼が正常な呼吸法をとつぐに忘れ去つている事實を、顕著に表わしていた。

短い間隔で浅い呼吸を繰り返しながら、少年 佐倉光太郎は剣と魔法の世界に憧憬を抱いていた過去の自分、その残念なお頭を殴りたくて仕方がなかつた。

半分泣きべそをかきながら、魔法の豪雨を搔い潜るように走り続けるこの少年。実は魔法を体感し得ない世界で生を受けた人間だつた。

彼が天寿を全うするはずだつた世界において、魔法は空想世界の

産物であり、ましてや、その空想が現実に干渉するなどあり得ないお伽噺だった。いや、もしかしたら、ただ見落としていただけで、実際には魔法社会というレイヤーも存在していたのかもしれない。むしろ、そうあって欲しいと願つたこともあった。しかし、願いはするものの、それが都合よく自分の現実に顯れるなど、佐倉はあるで信じていなかつた。

いつか悪の組織に追われた美少女が自分の前にやつてきて、何か特別な力を与えてくれるんじゃないか、と妄想することはあつたけれど、それはあくまで妄想の範囲内での話。彼の妄想がその領分を逸脱し、現実を闊歩することなど、当の本人だつて信じていない。

いや、信じていなかつた。

少なくとも、彼が己の世界で過ごした僅か14年、なれど、彼が歩いてきたすべての中で、魔法なるものと触れる機会など終ぞ訪れなかつたのだから。

時に、そんな佐倉少年は、現在戦場のど真ん中を颯爽と駆け抜けていた。

視界の中で炎と水の塊が縦横無尽に飛び交う、そんな視覚メディアでしか遭遇しなかつた戦場を、スタンスマン顔負けの度胸で駆け回つていた。

(なんだろう。いったい何が悪かつたんだろう)

飛んでくる無慈悲な砲撃に気を配りながら、佐倉は自問自答する。いつたいどこで自分の歯車は狂つてしまつたのだろう、と。

あれだらうか。自室でこつそり、右手から雷を出そうと試みた、あれがいけなかつたのだろうか。鏡の前で黒い手袋を嵌めてポーズを決めた自分に酔いしれていた、あれがいけなかつたのだろうか。

実際に雷など出ないと理解していた。理解していたが、その時の佐倉は雷が出したかつた。体内に備蓄した電気が云々と色々と理屈

をこじつけて雷を出したかつた。

火は暑苦しい印象で、冷静な自分には適さない。水はなんか地味な印象を受ける。なので雷を出したかつた。風もよかつたが、雷のほうが、なんか、あれだつた。クールで尖がつている気がしたから。あと、漫画に出てくる、主人公の親友で実家が暗殺一家のあのキャラクターも、雷を武器に闘っていた。あのキャラクターが好きだつたから、雷が良かつた。

だからといって、雷を使って悪漢を感電させたい、とかそういうのではない。佐倉は雷を使って対象物を斬りたかつたのだ。

雷に斬るという性質があるかどうかは大して重要ではない。大切なのは、彼が雷を使って斬る、という行為を夢見ていたことだ。渴仰といつても差し支えない、と佐倉本人は思つてゐる。

そういえば、紫電一閃という四文字熟語があつた氣がする。意味は分からぬけれど、雷を使えるようになつたら、そういう名前の必殺技があつてもいいかも知れない。

そんな香ばしい、しかし思春期を直走る人間にとつて日常という地肌に潤いを保つ大事な栄養ドリンクであるその妄想こそが、この状況を作りだした原因かもしれない、という考えに佐倉は行き着いた。現状を鑑みて、その推理が妥当、いや至当と言えるだろう、と。以上の内容を僅か数秒間で展開してみせた彼の脳内を、10人のモニターが観賞していたとしよう。その10人は間違ひなく、彼が冷静さを失い恐慌していることに気づくだろう。しかし、行き場のない感情は、時に無理やりにでも矛先を向ける対象を作りだす。そして、それはこの少年も例に漏れず、彼のささくれ立つた感情はおかしな方向へ向かい、迷走し始めていた。

その時、耳元でつんざくような金切り声が上がり、佐倉は我に返る。

「佐倉君、後ろ、うしろ！」

悲鳴が多分に配合された台詞とほぼ同時に、背後から轟音と一緒に伴う衝撃波が襲いかかってきた。

爆風に背中を押され、前のめりに倒れそうになる。しかし、歩幅を広く取ることで、半ば強引にだが、足を止めることがなく体勢を整えることに成功した。

「大丈夫？」

再び、耳元で声がした。ハンドベルを鳴らしたような綺麗な高音が、心配そうな色を載せて佐倉の耳に入り込んでくる。騒音にかかり消されそうな声量も、ほとんど耳に触れそうな距離から発せられれば、拾い上げることは容易だった。

「大丈夫。それより、そつちこそ、平氣？」

佐倉は喘ぎながら、半べソだった顔に無理やり笑みを灯した。声の主から僅かにいぶかしむ気配が届いたが、今の彼にそこまで氣を配る余裕はない。やせ我慢で笑顔を取り繕つことが精々だった。

「うん。平氣だけど」

佐倉が着てるワイシャツの、その襟元にしがみ付いた、手のひらサイズという形容に過不足ないほど小さな『同級生』は、申し訳なさそうに言葉を続けた。

「あの、本当にじめんね」

彼女の台詞を聞いた途端、佐倉はやせ我慢でなく、小さく笑みをこぼした。

また近くに魔法が落ちてきた。今度は小さな悲鳴を受信した。爆風から彼女を守るよう手を繕す。

「あ、ありがと」

控えめな謝辞が聞こえてくる。至近距離でもうつかり拾い損ねてしまいそうな、かぼそい声に、普段の彼女とギャップを感じてしまう。少し調子が狂う。

「落ちないで、くれよ。今は、洒落にならない」

「うん」

「落ちても、探さない」

「お、落ちないから！」

彼女の声に張りが戻つたことを確認し、佐倉は意識を切り替えた。切れ間なく降り注ぐ魔法の応酬は、未だ終息の気配を見せない。それらが自分たちを標的に放たれたものでないことが、不幸中の幸いだった。

弱気になつている場合ではなかつた。今すべきことは生き延びることだ。この小さな同級生と一人で、この戦線を抜け出さなければいけない。

この、『大嫌い』だった同級生と一人で。

01 擬態少女は自己紹介し忘れた

いくらなんでも酷すぎる。

口を衝いて出そうになつた言葉を飲み込み、私はもう一度彼にピントを合わせた。

やっぱり、酷い。その道の達人なら噴飯ものだ。玄人を自称する私から見ても、それは論評に値しない粗悪品としか映らなかつた。

それほど、彼の“擬態”はお粗末だつた。

あれでは自分がはみ出し者だと吹聴して回つてはいるようなものだ。周囲に対する配慮が、些か欠け過ぎてはいなか?

(いや、違う。あれは、初めからその気がないんだ)

黒板を背に佇む彼の姿は、険呑でないにしろ、明らかに人を寄せ付ける雰囲気でもない。例えば、死期を悟つた老犬のようにくすんだあの瞳は、一目で彼が“歪んでいる”ことを私に納得させた。どうやら、彼は恐ろしく世渡りが不得手な人種らしい。それは私に言わせれば、とても頭の悪い部類に入る。ついでに、お近づきになりたくない人間にもカテゴライズされる。そして、彼がそのカテゴリーに括られることは確定済みだつた。

第一印象から躊躇した転校生をしばし憐憫の眼で眺め、それから窓の外へ視線を移した。

距離を取ると決めた以上、彼に対する関心は持ちたくない。この憂鬱さを助長するような雨模様のほうが、幾らかマシだと思つた。

しかし、結果だけ言うなら、私は彼から距離を取り損ねてしまつた。

なぜなら、離れようとする気持ちそのものが、すでに彼に対する引力を兼ね備えていたのだから。

……多分。

01 擬態少女は自己紹介し忘れた～運命の日まであと三週間～

教室のドアを潜ると、幾人かのクラスメイトに声を掛けられた。各々の追加減で簡略化された挨拶は、そのどれもが今は朝で始業前に当たることを教えてくれる。

愛想良く無難に挨拶を交わしながら、自分の机に向けて足を進める。窓際から一列目の最後尾という、立地条件としては中々の物件だ。しかし、そこには至るまでの過程に少々不満が残る、そんな准優良物件が私に充てがわれた座席だった。席替えの籤で手に入れた。ちなみに、第一志望は廊下側の、後ろから一番目の席だった。

席に着くまでの間、もう何人かと挨拶を交わす。須らく愛想良く応対すべし、と胸の中で呟きながら、柔らかい表情を心がける。こういった気配りが必要な状況が頻繁に訪れるから、窓際付近の席は未だ頭から“准”の文字が消えない。

そうこうしている間に座席に着いてしまった。学校指定の鞄を机のわきに引っ掛け、スカートを押さえながら椅子に腰掛ける。そのまま周囲を見渡すと、室内に設置された机の半分に、すでに鞄が掛かっていた。

教室内の生徒は、それぞれが居心地の良いグループに分かれ、朝の談笑を楽しんでいる。中には少數だが、どのグループにも属さず、椅子に根を下ろしている生徒も点在していた。

私が教室に入った時、真っ先に声を掛けてくれたのが、真ん中付近に屯している女子グループだ。今は、昨日のドラマで主役を

演じた、韓流スターの話に花を咲かせているようだ。個人的に、あの役者の何が良いのかさっぱりわからないが、普通の女の子には魅力的に映るらしい。

私は両腕を放り投げ、だらしなく机の上に突っ伏した。ああ、頬に触れる机がひんやりと気持ちいい。席に着いてしまいさえすれば、誰かに神経を使う頻度も下がる。それについては正しく優良だと思った。

担任がやつてくるまで、まだ時間がある。最近まともな睡眠ができていない私は、残りの時間を仮眠に充てて過ごすこととした。だらしなく前に投げ出された両腕を引き寄せ、その上に頭を載せる。出来あいの枕の上で、心もち顔が窓側を向くよう調整した。すると、隣の空席が目に留まった。

しばし、周りに気づかれないよう、その空席を見つめる。

「どうしたのさ？ なんかテンション低いじゃん」

頭上から落ちてきた声に、内心舌打ちを禁じ得なかつた。それをおぐびにも出さず、瞬時に入当たりの良い表情を取り繕う。

顔を上げると、さつきまで女子グループに混ざっていた一人が人懐こい笑顔で佇んでいた。と同時に、こちらに視線を送る男子生徒に気がついた。彼は私の視線に気づいたのか、動搖を抑え込んだような変な表情を作り、自分のグループの会話に混ざり始めた。

(……ああ、そういうこと)

女子の私から見ても魅力的な容姿を持つこの少女は、背が低く、くりっとした大きな瞳が可愛らしい。髪の毛にかけられたウェーブは校則違反だが、童顔を気にしている本人にとっては精一杯の御酒落らしい。

確かに、想いを寄せる男子がいても不思議でないと思う。

なんか無駄な情報を仕入れてしまった。まあ、本人への密告は勘弁してあげよう。

それより、今はこの少女への応対のほうが優先順位は高い。よつて、どうでもいい情報はとつと記憶の隅へと追いやってしまう。

「おはよ」

「おはよ。つて、せつきも言つたし」

私の挨拶に少女が笑いながら答えた。私も愛想笑いを返した。

「で、どうしたの？　なんか見るからに体調わるーいつて感じだよ
「んー、ちょっと調子悪いっていうか」

「あ、生理？」

「おい」

臆面もなく大声で何て事を、と抗議の視線を送る。しかし、少女は悪びれた風もなくカラカラ笑っていた。何一つ面白くなかったけれど、私も彼女に合わせるように笑った。

でも、近くで騒いでいた男子グループの会話が刹那だけ途切れる瞬間を、私は見逃さなかつた。今は何でもない風を装つて会話を続けている彼らに、聞かなかつたふりをしてくれるのはありがたいけれど、いちいち反応して欲しくない、と複雑な感情が芽生えた。男子という生き物は、どうして……。

「まあ、なんというか。ぶつちやけ寝不足なんだよね」

「そつか。なんか邪魔しちやつたね。今度は安心して、ゆっくりお休み」

少女の言葉に、クスリと笑いが零れた。

私が当たり障りない返事を返すと、少女は自らのグループへと帰

還した。それを見届けてから、もう一度、机の上に突っ伏した。

普段の私なら、鞄を机の上に放り投げ、真っ先に彼女たちに合流しているところだ。たとえ会話の内容に着いていけずとも、聞き役に徹し、適当に共感を示していれば周囲から浮くこともないから。しかし。

なんか寝不足だつてや。

そなうなんだ。じゃあ、静かにしてよつか。

いや、うちらだけ静かにしてどうすんのや。

確かに。でもや、なんか最近付き合つて悪くない?

そうか? もともとあんな感じだな。

ちょっと、ボリューム下げよつよ。聞こえちゃうつて。
ええ? もう寝てんだろ?

(全部聞こえてるつづりの)

両腕の中に顔を埋めながら、私は小さく舌打ちした。その音は室内の喧騒に書き消され、きっと誰の耳にも届いていないだろう。

最近は自分でも上手くないな、と感じる。

何が上手くないかといつと、"擬態"することが、だ。これは着ぐるみ、もしくは仮面と言い換えてもいい。建前は、少し違うかな。何らかの方針を示しているわけではなく、もつと場当たりをねらつたものだから。

要は状況に応じ、自分の見せ方を変えることだ。その結果、環境に適応できることを望んでいる。

私はこれを擬態と呼んでいる。

環境に適応することが擬態の主旨なら、他人と摩擦を起こすことはその主旨から外れてしまう。だからこそ、最近の私はどうにも上手くないのだ。

軋轢とまでは言わないが、交友関係に潜在的な摩擦が燻っている

感触は否めない。顕在化するほど大きくなつてないにせよ、持つていて気持ちの良いものではない。

それなのに、私は擬態を洗練させるモチベーションを抱げずにつた。その理由は曖昧で、未だ不透明なままだ。しかし、原因だけは明瞭だつた。

視線を窓側にスライドさせる。誰もいない空席が目に入る。

教室の窓際。その最後尾に位置する座席。誰もがうらやむ優良物件。

この座席、少し前まで、毎日のように机の上に花が置かれていた。私が花を置くこともあつた。そして、花が置かれるようになる以前、一人のクラスメイトがこの椅子に座つて授業を受けていた。

クラスメイトの名前は、真田恭介といつた。

恭介が死んでから、私は擬態する価値を見失つているような気がする。

真田恭介とは十年来の知人だつた。私たちの間柄に説明書きの欄があるなら、幼馴染と記述されて差し支えない二人だつたと思う。

互いに14歳を迎えた後も、よく話していたと思う。

仲が良かつた、と思う。

そんな恭介が死んだ。

病気ではない。小さな子供を庇つてトラックに轢かれたとか、そんな英雄譚でもない。原因は至つて陳腐な、階段から足を滑らしての脳挫傷。

あの日、五月晴れの合間に縫つように訪れた雨が、校舎の階段に湿氣をもたらしていたのだろう。彼は移動教室の最中、運悪く湿気に足を取られた、という話だ。全て人づてに聞いた話だが。

私は恭介の死に目に立ち会つていない。彼が階段の踊り場で倒れ、救急車で運ばれていた時間、私はいつたい何をしていただろう。す

でに特別教室に着いていたのだろうか。覚えていない。

ただ、彼が逝去したという知らせが舞い込んできた、あの瞬間だけは鮮明に思い出すことができる。

あの時、私は自室に充てがわれた一人用のベッドの上に寝転がり、恭介に宛てた御見舞メールを作成していた。内容は『災難だつたねとか『日ごろの行いが悪かつたんだ』など、自分の気持ちを上つ面の毒で誤魔化した文章だった。

彼の容体は心配だつたけれど、どうせすぐ帰つてくるだろう、と高を括つていた。その時になつたら、快気祝いにこのメールを送りつけてやろう、そう考え、一人ほくそ笑んでいた。

だから、恭介がいなくなるなんて、夢にも思わなかつた。

あの瞬間、私の心は世界から遊離し始めた。その感覚は、今も心臓に焼き痕を残したまま消えてくれない。

それから一週間、二週間、一ヶ月と経過し、昨日で丁度四十九日を迎えた。彼の魂はすでに冥府への旅路へ赴いてしまつた。

世界の流れは迅速で、彼を失つた同級生達も、次第に元の笑顔を取り戻していった。ここ最近では、前日のテレビ番組を肴に盛り上がることができるくらいに。

同時に、真田恭介という存在が風化していく様を、まざまざと見せつけられているような気がした。それがナルシズムにより喚起された、穿った認識であることは理解していた。理解していたが、恭介がいない日々をたゆたう私は、未だこの世界に彼の面影を探し続けっていた。だから……。

抗いたくても、時間は何の感慨もなく彼の死を置き去りにし、私たちから遠ざけていく。しかし、私の心はまだ恭介に寄り添つたままだつた。

故に、その心は当所なく宙に浮いている。

書きかけのメールは、削除していない。今も携帯電話の中で、送信される時をずっと待つてている。

朝の喧騒に耳を貸しつつ、自分はどこの詩人だと嘲るも、口角がそれに応えることはなかった。零れ落ちた溜息も、周囲の雑音に溶けて消え、定まらない感情だけが自己主張を続けていた。

(私だけ別の教室にいるみたい)

机に突っ伏していた顔を上げる。眠る気分は霧散してしまった。枕にしていた両腕を軽く解し、乱れた前髪を整える。

一年前、とある事情でバッサリ切り落として以来、ミニティアムシヨートで維持してきた髪型だ。けれど、今は湿気のせいだろうか、酷く鬱陶しく感じる。思い切って、もつと短くしてしまおうか。

頃に掛かる髪の毛を両手で一度だけ搔き上げると、後は軽く撫でるようにしながら髪全体を指で梳いた。それを終えると、頬杖をつき、視線を窓の外に放り投げる。

灰色に覆われた世界が飛び込んできた。様々な絵の具を混ぜ合わせ、大量の水で薄めたような色だつた。雨はしとしと降り続け、その雨脚に勢いはない。それらの叙景が私の内面を描いた風景画のように思えた。

どうやら、私の詩人モードは継続中らしい。そう思つと、今度こそ口角がつり上がるのが分かつた。

(こいつのこと、携帯小説でも書いてみようかな)

一瞬頭を過ぎつた考えを、しかし、次の瞬間には、にべもなく切り捨てた。そんなの柄じゃないから、と。それに、ともすれば冗長な氣味な言い回しを多用しがちな私に（こいつの主張を自分でするつて恥ずかしい）、今の気持ちを読みやすい言葉でまとめる自信もなかった。

なにより、携帯小説の主人公になるべき女の子は私でなく、もう別に存在していた。例えば、今、私と灰色を隔てるよう、窓際の席に腰掛けたこの少女など、悲劇のヒロインにつけてつけの配役じゃないか。

「おはよ。起きてる?」

「おはよ。御覧の通りさ」

花にたとえるなら、桔梗、だろうか？

桔梗の花言葉は『清楚』だ。その花言葉は、この少女を表現する上で、この上なく適切な言い回しの一つだと思つ。

その桔梗は、私のおどけた返答に、薔薇が綻ぶような笑顔を見せた。口元につつましく浮かぶ笑窪も、この少女をより可憐に染め上げることに一役買つている。

ただ、笑顔の中に幾許かの疲労が配色されていることも気がついた。その理由に心当たりがあるものだから、私の心は少女への同情と合わせて、雨模様を色濃くした。

しばし、少女と他愛のない会話に興じる。

昨日のドラマがどうとか、あの役者がどうとか、おそらく先ほどまで女子グループで話していた内容なのだろう。それらを青写真に、彼女は会話を組み立てていく。私も適当に相槌を打つて、それに答えた。

不意に、少女が話題を変えた。

「なんか、お疲れ？」

私に話しかけているはずなのに、少女の視線は机の上だった。し

なやかな指が机の表面を優しく撫でる。そこにあるべき残滓を愛おしむようだつた。その仕草があだっぽく映り、少しどぎマギしてしまつ。同時に、彼女がいつたい何を求めているかを汲み取り、それを返答に含めることができた。

「まあ、四十九日だつたから」

「……うん」

この少女が求めているものは、きっと私のそれと近い色をしている。そう考えての返答だつたが、どうやら正解だつたらしい。

処女雪のような肌にひつそりと咲いていた笑顔が、僅かに萎んで見えた。それは私の言葉に気落ちしたのではなく、蓋をしていた感情がようやく顔を出した風だつた。

この少女は恭介を求めていた。正確には自分が抱える彼への想いを、誰かと共有したがつていた。それは彼女と恭介の関係を慮れば、仕方ないことだと分かる。

とはいへ、こちらに気苦労が圧し掛ることは変わらない。ため息を堪え、どんな話でこの子の期待に応えよつかと思案した。

しかし、その気遣いはすぐゴミ箱へ投棄することになる。

「悪いけど、どこてくれる？」

傍らで発せられた低音に、一度心臓が大きく跳ね上がつた。どくどく、と余韻を引きずりながら、声の発生源に目を向ける。その姿を視認した途端、私の表情は一拍もせず擬態を忘れてしまった。

背後に立つっていたのは男子生徒だつた。一日で雨に打たれると分かる様相だつた。

頭に被せたスポーツタオルの下から、水氣を帯びた黒髪が覗いて見える。他にも、半袖のワイシャツの所々が、生白い素肌に張り付いている様子が伺い見えた。女子と見紛う華奢な体躯が、この雨に

晒されてきたのだと容易に想像でき、少々瞪田させられた。

(傘、どうしたんだる?)

こちらの視線に気づいたのか、少年の瞳が私を捉える動きを見せる。長い前髪から垣間見えるくすんだ瞳は、デフォルトで霸気を感じさせない。そんな目を向けられた私はといつと、剥き出しの表情で見つめていたことに気がつき、慌てて懇ろな顔に飾り付けた。でも、上手くできたかどうかは自信がない。

そんな胸中を知つてか知らずか、彼の視線はすぐに外され、少女がいる座席へと向けられた。

「あ、ごめんね」

言葉と間をおかず少女は立ち上がり、入れ替わるように少年が椅子に腰掛ける。彼の淀みない動作から遠慮するそぶりは一切見受けられない。それもそのはず、この座席は一週間前、転校してきた彼に割り振られた椅子なのだ。だから、遠慮する必要なんてこれっぽっちもない。

「おはよう、佐倉君。ずぶ濡れみたいだけど、どうしたの?」

たおやかな笑顔を咲かせて少女は問いかける。
それに対する少年の回答は、

「べつに」

たった三文字で遂行された。なんとも拙速な受け答えだった。と
いうか、答えてすらいなかつた。

(いや、挨拶しろよ。その子おはよー、って言つたじゃん。べつに、つてなんだよ。べつに、つて)

彼のあんまりな応接に、不健康な気持ちが鬱積していくのが分かつた。

少女は苦笑いを浮かべ、困ったように眉根を寄せながら視線を送ってきた。普段ならそれに苦笑をもって応えるところだが、今の私はそうしなかった。

勢いよく椅子から立ち上がる。気持ちが強すぎたせいか、存外大きな音がした。

どうやら思つた以上に感情が漏洩しているらしい。近くにいた男子グループが、何事かとこすらに視線を寄こしてきたが、今は取り繕う気も起きなかつた。

「ねえ、向こうに行こうよ」
「え？ う、うん」

私は無理やり笑顔をでっち上げ、目を丸くしている少女を誘つてこの場から離れることにした。

いつもの女子グループに合流しようと足を踏み出しかけた時、間が悪いことに、担任の先生が教室のドアを開け、中に入ってきた。

「おーし、席に着け」

四十年代半ばに差し掛かり、頭髪が些か心もない担任のガラガラ声によつて、各所で固まつっていたクラスメイトたちはどんどん散つていいく。

「じゃあ、私、もう行くね。佐倉君もごめんね」

少女は私と少年に一言かけると、自分の席に戻つていった。私はそれに軽く手を振つて答え、少年は無言を返した。

チラリと横を見ると、少年が鞄の中身を机に収めている姿が目に映る。それを見ながら『憤懣遺る方無い』とはこういう気持ちを言うのだろうか、と以前辞書で見つけた言葉を思い出し、椅子に座り直した。

出席を確認している担任を眺めながら、ふと、自分も鞄に中身を入れっぱなしだったことに気づいた。別に急ぐ理由もないのに、ゆっくりと筆記用具などを机の中へ放り込んでいく。

必要なものを全て詰め終えたころには、担任の確認作業も終わっていた。点呼は取らず、欠席者を確認する穴埋め方式なので、生徒がいちいち返事をする必要はない。ちなみに、今日の欠席者は、県大会に出場している運動部の生徒たちだけだった。

ガラガラ声で伝えられる連絡事項を耳に入れながら、私は隣の少年に意識を向ける。

佐倉光太郎。

つい最近、このクラスに転入してきた男子生徒だ。

先ほどのやり取りを鑑みれば、彼の対人適応能力がどれだけ絶望的かは簡単に説明できると思う。絶望的というか、むしろゼロ。皆無。あつたとしても、それは誤差。隣に座つていて、本当に同じ言語を共有しているかどうか疑わしくなる。

頬杖をつき、チラリと横目で彼の様子を伺う。

彼は連絡事項を聞いているのかいないのか、ぐずついた天気が続く窓の向こうを眺めていた。というか、被つたままのタオルは取らないのか？

その姿を盗み見ながら、私は彼が転校してきたあの日を思い返す。早々に彼の正体を看破した私は、関わり合いにならないように、と

自分の中に誓いを立てていた。

案の定、彼は持ち前のコミュ力を遺憾なく發揮し、教室内に「ディス・コミュニケーションの山を築いていった。結果、転校初日にして村八分という、なんとも素敵なポジションを手に入れたようだ。前述の誓いを立てた私は、当然、初めから彼に不干渉のスタンスだった。いや、不干渉のつもりだった。しかし、悲しいかな、このクラスには空席と呼べる座席は隣にしか存在しなかつたのだ。

担任も級友たちも、ただ隣の席というだけで転校生の面倒を見ることになつた私の気持ちを、少しは察してほしいものだ。

隣の席だから、まだ揃えていない教科書を見せることになつた。隣の席だから、校内を案内してあげることになつた。隣の席だから、隣の席だから……。

正直、やつていられない。

別に我儘でそう言つていいわけじゃない。これでも私は頑張ったほうだ。こと関わらざる得ない状況ならば、と最初に立てた誓いを投げ捨て、多少なりとも交流を深めようと努力した。しかし、深まつたのは互いの溝だけだった。

だって、間を埋めようにも会話が成立しないのだ。これじゃどうしようもない。

話しかけても、返つてくるのは無言の相槌ばかり。たまに返事をすることがあつても、先ほどのように一言、よくて一言で会話を終える。しまいには相槌すら消え失せる。こんなスタンスの男子と、どうやってコミュニケーションを図れというのか。

というか、相手は男子なんだから、同じ男子が引き受ける役回りじゃないか、これ。なんで私に御鉢が回るわけ？　ああ、隣の席だからか。

まあ、そんなわけで。今は“なるべく”関わらない方向で、心に折り合いをつけるよう努力している最中だ。

本当に、やつていられない。

小さくため息を吐いた。

「……何？」

掠れた低い声を伴い、彼が振り返る。まさか反応されると思わず、一瞬心臓が飛び出たかと錯覚した。

「あ、え、ええと」

一対の仄暗い瞳に射抜かれ、私は咄嗟に反応できなかつた。しかし、何か言わねばと焦る気持ちに背中を突き飛ばされ、無理やり口を開く。

「あの、べ、別になんでもな　」

「そこ！　私語は慎め」

担任から注意が飛び、私は出来損ないの笑顔を携えたまま身を固くした。

周囲からクスクスと忍び笑いが聞こえる。途端に顔面が熱を帯び、私は肩を狭め縮こまつた。隣を見ると、彼はしれっとした顔で頬杖をついている。

(くう……ムカツクムカツクムカツク…)

心の中で呪詛を編みつつ、彼の評価をもう一段階、蹴り落とした。

担任が連絡事項を終え、日直が号令をかける。室内に弛緩した空気が漂い、ざわめきが広がっていく。

今日は一時間目から移動教室だ。予め机の上に用意しておいた教

科書の類を手に取り、椅子から立ち上がる。

「佐倉君。第一 理科室だけど、もう場所覚えたよね？」

一応、面倒を仰せつかつてゐる身なので、義務として一声掛ける。彼は無言で首肯し、私の横を通り過ぎていく。その動作の中に、こちらを見る工程は含まれていなかつた。

私の感情は、もはや呆れの方が大きな比重を占めていた。軽く息をついて、外の景色に視線を移す。

「階段で転ばないようにね」

止む気配のない雨を日にしたら、何の気なしに言葉が零れ落ちた。視線を窓の外から教室へ戻す。視界には教室から出ていく生徒たちと、なぜかハトが豆鉄砲を食らつたような表情で佇む佐倉君がいた。

なんか、初めて彼の感情に出会えた気がする。

「ほら、早く行こうよ」

ぽけーっと突つ立つたままの彼を急かし、教室の出入り口へと足を運ぶ。後ろから彼が追いかけてくる気配がした。

その時、何の前触れもなく、辺りが閃光に包まれた。

雷だ。

そう意識した次の瞬間、地鳴りが起きたよつた轟音が響き渡る。

「キャアッ！」

雷に反響するように、教室に残つていた数人の女子生徒が悲鳴を上げた。私はといふと、生憎、雷程度で悲鳴を上げるような可愛ら

しい肝つ玉は持ち合わせていない。

とはいって、不意を突かれたこともあってか、鼓動が鳴りやまない。胸に手を当てながら、不意打ちに弱いのかな、ヒビリでもいいことを考える。

ふと、彼はどんな表情をしているのだ？ と気になつた。

振り返ると、彼の顔にはいつも通りの能面が張り付いていた。ただ、しきりに自分の右手と窓の外を見比べている。どうしたんだろう？

「どうしたの？」

気になつて尋ねてみる。

彼はしばらく同じ動作を繰り返した後、私の方に向き直る。そして、一言も言葉を発することなく、教室を後にした。結果、置いてきぼりを食らう私。

類を引きついでせ、一つ、大事なことを思い出す。

（……ああ、そうだった。なるべく“話しかけない”んだった。そう決めたんだつた。そうだった。忘れてた。私としたことが）

なぜだろう。笑えてくるのは、なぜだろう。

「……いや、うう」

おおよそ女の子の口から出たとは思えない声色で、その言葉は呟かれた。

もちろん、私の声だった。

とか、いつまでタオル被つていの氣だろ？

つづく

02 いりして立花柊は擬態した

梅雨明けの兆しは一向に姿を見せない。七月半ばを通り過ぎた本日、空を仰いでも日の光は私たちに微笑まず、窓の外では相変わらず曇天が幅を利かせていた。

そんな雨模様を模倣するように、現在、校舎全域は湿った空気で覆われていた。それはこの教室も例外ではなく、室内を漂う暗い雲が肌を刺すような緊張感を伴いながら、私たちに窮屈な呼吸を強いる。しかし、その時間も長くは続かないだろう。もつてあと数秒で終わりを迎える。

そう考えた時だった。

「終わったあああ！」

終了のチャイムと連動するように、教室中にけたたましい叫びが響き渡る。同時に笑い声が室内を席捲し、雨雲で満ちた教室の中に光が拡散していく。

叫び声が示した通り、今この時をもって、期末試験の全日程が終了を迎えた。追い捲られた試験勉強からようやく解放され、皆一様に気持ちが高ぶっているようだ。もつとも、終わりを叫んだ本人が意図したところは、断末魔のそれに近いようだったので、これから若干のフォローが必要になるかもしれない。

そんなことを考えながら、私は自分の机のテスト用紙を後ろから順に回収していく。それらを担当教師に手渡し、自分の席へ戻ると、机の上に出しつぱなしだった筆記用具を、閉じたままの鞄の隙間に無理やりねじ込んだ。

(さて、と)

大きく伸びをして、凝り固まつた身体に酸素を取り入れる。室内には解放感に満ちたざわめきが波及し、私もその空気と響き合つとうに、自然と深い呼吸ができた。

泥を洗い落とした気持ちを携え、先ほど叫び声を上げた主に視線を向ける。彼女は頭を抱えながら机の上に覆いかぶさつていった。いつもは忙しなく動く小さな背中が、今に限つては人形のように微動だにしない。その様子から、彼女のテスト結果を容易に見積もることができる、私は顔から苦笑が零れ落ちた。

胸の中で仕方ないな、と呟いて、彼女のもとへ歩み寄る。

「千秋、お疲れ様。ようやく終わったね

「……」

「今日は、これからどうしよう。どうか寄つてくれ?」

「……」

反応なし。一昨日、『臨終を迎えた家のテレビのように動かない。そういうえば、父がこれを機に地デジ対応に切り替えるとかなんとか言つていた。いや、関係ないけれど。

彼女は机の表面におでこをくつつけながら、椅子の上で粗大ゴミと化している。このまま掃除当番に回収され、ゴミと一緒に焼却炉へ投げ込まれてしまうのでは、と心配になる。

私は少女の肩に手を置き、揺さぶりながら声を掛けた。

「ほら、千秋。しつかりしなさい」

「……うんへえ。去れや、関数が得意な輩は今すぐ去れや」

反応があつた。拗ねた瞳と声色でこちらを威嚇してくる千秋という名の少女。その愛らしい仕草に、一瞬自分の中にマゾヒズム（サディズム？）が芽生えたかと疑つてしまつたが、この場はそれを置いといて、先に進むことにする。

よつやく反応したかと思えば、千秋は涙目でこちらを睨んでくる。

私はシャボン玉に触れるような心もちで、千秋の頭に手を添えた。

軽くウエーブが掛かつたふんわり柔らかな髪の毛を、ぽんぽんと軽く弾ませる。

「ふにゃあ……」

千秋の声帯が、なんとも気の抜ける音色を仄弾いた。危機感を丸ごと遠投した無警戒さに、日向で惰眠をむさぼる子猫を連想させる。その弛緩しきつた様子は周囲の生徒たちを和ませ、私も彼ら同様、緩んでいく頬を止められない。

千秋のご機嫌取りは、まずここから入るのが定石だ。私は彼女の頭を撫でながら、次はどうやって慰めよつかと思案する。

「お前ら、つき合つちゃいなよ」

突然、じぢりを茶化す声が投げ込まれたので、そちらに視線を投げ返す。はたして、そこには背の高い女子生徒がいた。尼そぎの髪型がその背丈と合わさり、口には出さないがマツチ棒のよつだと思った。

女子生徒は皮肉屋を氣取ったような笑顔を張り付け、こちらに寄つてくる。そんな彼女を、私は普段と変わらぬ対応で迎え撃つ。

「なにか、小夏。嫉妬かしり?」
「いや、意味わからんし」

「こちらの軽口に呆れを示しつつ、大して意に介した様子も見受けられない。私が小夏と呼んだ少女は、千秋が突つ伏したままの机の上に、腰掛けた。座るまでの動作に色気が足らんな、と頭の中で勝手に値踏みしたのは内緒だ。

「うああ、やーめーれー」

千秋が情けない声を発する。今は私に替わり、小夏が千秋の頭を撫で回していた。彼女の大きな手が円を描くたび、見ている側に粗暴かつ力強さを感じさせる。おかげで千秋の髪型がどんどん無秩序化していく様子を確認できた。

「だから、やめろっつつの！」

小夏の大きな手を払いのけるように、千秋が反りかえる。それから、我が身に狼藉をはたらいた下手人をひと睨みすると、前衛的な生け花と化した髪の毛を手櫛で整えていく。その下手人たる小夏はとくに悪びれた様子もなく、涼しい顔で千秋の視線を受け流していた。私は小夏の荒療治に苦笑を浮かべつつ、内心、千秋の調子が戻ってきたことを喜んだ。

ただ、千秋は小夏の態度が気に入らなかつたようだ。

「……おのれ、マッチ棒め」

彼女の口から小さな呟きが零れ落ちる。同時に小夏の纏う空氣に変化が生じ、私は頭の中で、あーあ、と呟いた。

小夏は自分の背丈を非常に気にしている。中でもマッチ棒呼ばわりは彼女の前ではご法度だ。何か嫌な思い出でもあるのか、詳しい事情は私にも分からない。しかし、もし件の渾名で呼ぼうものなら、何人たりとも彼女の静かな怒りに身を焼かれること請け合いだろう。例えば、いま目の前で渾身のアイアンクローラーを身に浴び、見えないロープを掴もうと、必死でもがき苦しんでいる小さなクラスメイトなどその良い例だ。

「ぐはっ」

小夏の手から解放された千秋は、まるで血反吐を吐くような呻き声を上げ、机の上に沈んだ。この様子なら、まだ余裕があるかもしれない。千秋の様子を見下ろす小夏も、先ほどと変わらぬ澄ました顔のままだ。こちらもまだまだ余力を残しているように見える。ちなみに、私は一人のじつした掛け合いを、苦笑いと一緒に見守ると決めている。

小夏の170センチに届きそうな背丈は、女子の中に入ると浮いて見える。私も小夏ほどでないにしろ、小学生のころは他の女子と比べて上背があるので、彼女の纖細な気持ちは分かる気がする。

そんな小夏と反対のベクトルでコンプレックスを抱えているのが千秋だつた。彼女の小動物然としたルックスは男女問わず人気を集めやすい。しかし、本人はその愛玩動物のような立ち位置に、日々、異論を唱えている。もっとも

「うう、ひいらぎこ。小夏ちゃんがいじわるだ」

傍目からは、まんざらでもない様子に見えるので、彼女の主張がコンセンサスを得るには、いまいち説得力が欠けていた。
顔を上げ、涙ぐみながら胸にすがりついてくる千秋を、私は呆れを織り込んだ笑顔で迎え入れる。正直暑苦しくて適わないのだが、同時に、彼女の姿はこちらの保護欲を刺激してくるもので、それほど悪い気もない。

綿菓子に触れるよじこ、そつと田の前にある頭を撫でる。こそばゆいのか、千秋は軽く身じろぎしてみせた。その仕草を見て、胸の中に温かい日だまりが生まれる。

「……終って、お母さん？」

「誰がお母さんよ

からかいと呆れがバランスよく配合された小夏の言葉を、すぐさま斬つて捨てる。この歳で、しかも同じ年の子供がいるとか、考えたくない。

「ひいらぎママあ

「誰がママよ

しかし、千秋が意味もなく悪ノリしてきた。甘ったるい声色と潤んだ瞳の組み合わせに、頭の悪い男子なら簡単に釣れそうだな、と埒も無い考へが頭に浮かぶ。近い将来、手当たりしだい男をたらしこむ女になつたらどうしようか。

なんて、本人が聞いたら100%異議を申し立てる未来を憂つるあたり、小夏のお母さん発言もあながち否定できない気がする。

「ひいらぎこ、聞いておくれよ

私の胸に顔を寄せながら、千秋がくぐもった声を上げた。

「はいはい、どうしたの?」

「あたし、もう死ぬ

縁起でもないことを言いだした。

「そりや、随分急な話ね

「テスト死する」

「あら、興味深い死因。是非あなたの身体で実証してみようつだいな」「ひどい…」

肯定の意を示したはずなのに、なぜか反感を買ってしまった。
千秋はおでこを私の胸にぐりぐりと擦りつけた。痛いのでやめて
もらえないだろうか。

「柊だけは味方だと思ったのに……もう泣きたいよ。泣きそつだ
よ。泣かせておくれよ」

「なんだ、その三段活用？」

「小夏ちゃんうるさいーーー！」

先ほどの件が尾を引いているのが、小夏の横槍に千秋が可愛らしく拗ねてみせる。それを見て私の顔は綻んでいく。視界の端に映った小夏が、なぜか胸焼けに耐えきれないような表情をしていたが、無視してかまわないだろう。

「はいはい、わかったから。そんなに泣きたいなら、思い切り泣いちゃいなさい」

「うん。最近ブラを着け始めた柊のお胸で泣かせておくれ

瞬間、周囲の男子生徒が身体を緊張させる、そんな気配を感じ取つた。

自分でも惚れ惚れするような笑顔を咲かせ、私は千秋の頬に両手を添える。

「アンゴントローラブルないけないお口はいいかなあ？」

言葉と同時に、千秋の頬を左右に引っ張った。
焼いたお餅を割る要領だ。

「ひ、ひいりやぎー？ いひやい！」

「んん？」

「いひやいつへは！」

「なんだつて？」

口の中に印象的な八重歯が一本ほど伺い見えた。可愛らしいと思つたが、いま必要なのは彼女に対する制裁だ。不届きな言葉を吐いたいけないお口には、相応の懲罰が科せられるべきなのだ。

「「めんなひやい」

「よし」

両手から千秋の両頬を解放し、もう一度、彼女の頭に手を載せる。髪型を崩さないよう配慮しながら優しく手を揺らすと、頬を押されていた千秋が目を細める様子を確認できた。「こちらの様子を眺めていた小夏の口から「飴と鞭か」などと奇妙な呟きが聞こえたが、それも華麗に無視してみせる。

遠藤小夏、岡田千秋、そして、私こと立花柊。中学校の入学式で初めて顔を合わせ、以来、ここに至るまで私たち三人は頻繁に行動を共にしていた。きっかけは千秋が声を掛けてくれたことだった。確か、各々の名前に季節が含まれていることから「これで春が揃えば春夏秋冬だね！」などと、千秋は主張していたのだ。さすがに、柊から冬を抽出するのは無理があるので、と私は指摘したが、彼女は存外強い執着を見せた。その時はとくにこだわりのない私が折れる力タチで決着がついたが、未だに、彼女がなぜあんなに執着していたのか、疑問は晴れない。

そんな私たちは三者三様、それぞれをまったく理解し合つていいとは言い難い。それでも、私はこの空間に、気負いなく呼吸できる清涼感を見出していた。それを提供してくれた千秋には、もっと感謝すべきなのかもしれない。改めてそう思った。

彼女の頭を撫でながら、私も心地よい空気を全身で感じ取る。そうしていると、不意に、耳が自分の名前を受信した。

「柊

一いち方に声を掛けたのか、はたまた呟いただけなのか。微妙に判断に困る程度に遠慮がちな声は、声変わり真っただ中来形容する中性さに満ちていた。しかし、女子の中で低めの声を持つ小夏よりずっと低いそれは、すぐに男子のものだと分かった。

「恭介。どうしたの？」

案の定、そこには私にとつて腐れ縁と称するに相応しい少年、眞田恭介の姿があった。この教室にいる男子生徒は恭介を除き、みんな私のことを名字で呼んでいる。なので、この男子生徒が恭介に当たることは考えるまでもなかつた。でも、きっとそんなことは関係なしに、私が彼の声を誤認することなどありえないと思つ。で、その恭介はと、心なしか表情から緊張が窺い知れた。普段の、私が彼に抱いているイメージとの間に、微妙に摩擦が生じる。

「少し、いいか？」

遠慮がちに聞いてくる彼の声から、硬質な響きを感じ取る。そして、ナデナデのお預けをくらつた千秋の唸り声から、恭介に対する敵意を感じ取る。

私は千秋の頭に手を置いて（敵意が消えた）、恭介に話しかける。

「なにそれ、告白？」

「……」

「いや、そこで黙りないで。怖いから」

茶化した言葉に無言を返されたことで、彼を和まそうといふ試みが失敗に終わったことを悟る。同時に再認識したのは、彼がいつも能天気な彼と違うことだ。その差異は私の心に奇妙な胸騒ぎを作り、水面に細波を起こした。

「……そういうやねえよ」

「あ、そつ」

だからだろうか、溜息と一緒に吐き出された彼の言葉に、平静を装いつつも、一瞬氣後れしてしまった。虫の居所が悪い、というわけではなさそうだが、今の彼は少し怖い。

恭介の視線は、私たちの間にある何もない空間へ僅かに揺らぎ、次いで意を決したように、こちらの瞳を直視した。いつもは場を盛り上げる篝火のような黒い瞳が、今は静かな光沢を放ち、見ている側に静寂をもたらす。彼の真剣さに手を引かれるように、私の感情も周波数を整え始めた。

恭介は何か言葉を発しようと口を開く。しかし、間が悪いことに、教室の扉が開いた。担任の教師の姿が見えたため、彼は「放課後、待っていてくれ」と言い残し、自分の座席へ戻つていった。残された私は、彼の不可思議な態度に首をかしげる。

「なにあれ?」

「ほう」

「ほほつ」

「……なにか?」

振り返った私を迎えたのは一対の瞳。かたや期待で輝度を増した宝石のように。かたや面白いおもちゃを見つけたガキ大将のように。

(ああ、こつものアレか)

やつ胸の中で座く。不本意ながら、この手の話題に觸られるのは初めてではない。本当に、不本意ながら……

「言ひとくたゞ、わかつてノリには付き合わなにからね」

だから、余計な発言が飛び出す前に、あらかじめ釘を刺しておぐ。

「その発言がすでに言質を『えでこね』とに『つきなよ』

いやらしこ笑顔を隠さない小夏の言葉に、少しムカツとする。しかし、ここで挑発に乗つてしまえば、相手の思つっぽだ。
ノリこつ手合いはノリからいの反応を見て楽しむことが目的だ。その対処法ノリ、すでに心得ている。

「やうね。小夏の言ひとけりよ」

私はお口様のような笑顔を作り、小夏の言葉を肯定する。それに反して、小夏は笑顔を引っ込めるが、今度はむくれ氣味に口を開いた。

「なんだよ。ノリ悪いなあ」

「小夏がワンパターン過ぎるだけよ。その手の話題はもう飽きたやつた」

「ふつて」

小夏は肩をすくめると、軽く息を吐いた。

「つまんないな、柊は」

「マンネリ化したネタで何度もちよつかいかけてくる小夏より、よっぽどレパートリーに富んでいるつもりよ」

「ぶー」

おおよそ小夏の人格に似合わない態度に、ツツコミを入れようか迷つたが、とりあえず放つておくことに決めた。それから、今度は期待のまなざしを捌きにかかる。二つのほうが、邪氣がない分、扱いに困る。

「あのね、千秋。ええと、申し上げにくいけど、あなたの期待に添う気もないからね？」

「えー？」

真珠のように瞳を輝かせていた千秋は、あからさまに不満そうな顔をした。そんな表情も可愛らしいと思つたが、だからといって、応えてあげるわけにもいかない。

「いいじゃん、ひいらぎ。現代版カナタとマジキみたいよ。ひとつも素敵よ」

「また古いものを持ちだして。あなたが楽しくても私の気持ちはどうなるわけ？」

「ぶー」

千秋がアヒルみたいに唇を尖らせた。小夏のそれと違い、こちらは彼女に良く似合っている。というか、流行っているのか、それ？

「ああ、そういえば、あの一人も幼馴染だっけ」

「やうやうー」

小夏の余計なひと言に千秋が喰いついた。彼女の目が再び輝きを取り戻す様が見えて、私は当然のように溜息をつく。大昔の神話まで持ち出して、この娘はいつたい何を望んでいるのか。

「ただのお伽噺でしょ。現実と『しちゃにしないで』

「ふーふー」

「ふーふー」

「ふーふーじゃないの。あと小夏はマジでやめて。見ていて痛々しい

い

「わざとだ」

「わざとかよ」

いい加減、担任の目が厳しくなつてきたので、私と小夏はそれぞれの机に戻った。

担任は簡単な連絡事項を終えると、すぐに教室から出ていった。掃除当番以外の生徒はみんな下校を始めたが、恭介が掃除当番だったせいで、私は彼が戻つてくるまで教室で待機するはめになつた。憑き物が落ちたような表情で教室を後にするクラスメイトたちを眺めていると、なんとなく、釈然としない気持ちが積もつていく。

小夏と千秋の姿はすでにはない。薄情にも私を置いて先に帰つてしまつた。帰り際に見せた二人の含み笑いには、思わず張り手を繰り出しそうになつた。

教室内に掃除当番の姿はなく、いま残っているのは、日直の生徒が一人と私を合わせた三人だけだつた。恭介の姿は見えない。まだ掃除中なのかもとも考えたが、先ほど彼と同じ班の生徒たちが、鞄を引っ掴み意気揚々と教室を出していく姿を見かけたので、それはないだろうと思い直した。人を待たせておいて、あの男はいつたいどこ

で何をしているのか。

「……地獄突き」

物騒な言葉が飛び出した。もちろん、私の口からだ。恭介に与えるべき制裁を吟味してたら、思わず口から出てしまった。日直の二人が驚いた顔でこちらを向いたので、私は慌てて口元を押さえる。それから愛想笑いを浮かべると、二人は揃ってそっぽを向いた。どういう意味だ。

多少不貞腐れながら、頬杖をついて、私は窓の外に視線を移す。すると、示し合わせたように、分厚い雲の合間から光が射した。久々に顔を覗かせたお天道様に、鬱積していた苛立ちが浄化されいく。

ああ、ようやく梅雨が終わる、そんな予感がした。テレビの中のお天気キャスターは、ぐずついた天氣が来週まで続くと話していたが、一昨日から今日までの間、前線に動きがあつたのかもしない。新しいテレビ、早く来ないかな。

外の景色を眺めながら、まだらな思考の中を泳いでいると、ふと、先ほどあった千秋との会話が頭を過ぎる。

(カナタとミズキ、ねえ。空の機嫌が直れば、夜には見えるかも)

未だ厚い雲が滯っている空を眺めながら、普段は意識の表層にも上らないそれらを思考の中で遊ばせる。そうやって暇をつぶしていると、いつの間にか残りの生徒たちも姿を消していく。それに気づいた時、少しだけ心細さを覚えた。

視線を窓から外し、椅子の背もたれに体重を預ける。背中と背もたれの間に、長く伸ばしている髪の毛が挟まつた。それを鬱陶しく感じたので、私はポケットから髪止め用のゴムバンドを取り出し、首の後ろでひと括りに纏める。首回りに涼しさを感じた。

纏めた髪の毛を背もたれの向こうに流し、もう一度、後ろに体重を掛ける。そのまま天井を見上げると、蛍光灯と天井の染みが見えた。あー、あー、と意味もなく声を出す。誰もいない教室での行為は、僅かな羞恥と緊張、そして高揚を心にもたらした。

(恭介、まだかな)

もしかして、約束を忘れて帰ってしまったのでは? そう思うと、急に心細さが増大した。お互い学校に携帯電話を持ってきていないので、連絡を取りようがない。どうしよう、と胸の中を不安の色が染めていく。

そのまま途方に暮れていいると、突然、教室の扉が開いた。

「悪い、待つたか?」

やつてきたのは恭介だった。彼の姿を目にした途端、安堵の色が不安を上書きしていく。それを悟られないよう、私は彼に向けて言葉を吐き出した。

「遅い、バカ!」

「は?」

私の言葉に、彼は一瞬だけ間の抜けた表情になる。しかし、すぐに顔をしかめて反論してきた。

「バカってなんだよ。ちゃんと謝つただろ」

「悪い、は謝罪に入りませーん」

「はあ? なにガキみてえなキレ方してんだよ」

「あんたが遅いからでしょっ。謝つて!」

恭介の頬がピクピクと痙攣する。彼は一度大きな溜息をつくと、わざとらしく口角を釣り上げ、こちらを挑発する言葉を並べ始めた。

「うひぜえ。なにこの人？ マジうぜえ」

「なにそれ、逆ギレ？ カッコわるーい。ていうか、ボキヤブライ

ー貧困すぎー」

「……」

「ひひらの切り返しに恭介は一の句が継げず、黙つて睨みつけてきた。私も睨み返す。お互ひの気迫は拮抗し、そのまま不毛な時間が垂れ流しになる。

先に折れたのは恭介だった。

「ああもう、やめやめ。」なんなくだらなことで時間つぶしてゐる場合じやねえんだ」「

「なにせ、自分が遅れてきたんじやない」

「くつ……はいはい、ごめんなさいね！」

一応、人を待たせたことに罪悪感があるのか、恭介は謝罪の言葉を口にする。その投げやりな口調に不満を抱きつつも、私は心の中で、ほつとしていた。

(よかつた。いつもの恭介だ)

幾度も繰り返したやりとりをそのまま貼り付けたような口喧嘩は、私の中にあつた摩擦を徐々に埋めていった。それは彼の瞳が、さつきと違う、いつもと同じ光を携えていたことも大きい。家に着いた瞬間とよく似た安心感を覚え、私の肩は自然と力が抜けた。

「んじや、行くぞ」

恭介は自分の鞄を掴むと、そのまま背を向けて歩き始めた。私は慌てて立ち上がり、自分の鞄を背負いながら彼の後を追つた。

恭介と並んで廊下を歩く。正確には、前を歩く彼の数歩後ろを、私が追従していく力タチで歩いている。他の生徒の姿は見えない。今日は部活動もお休みなので、皆もう下校してしまったようだ。人がいなくなるほど長い時間待たされていたのか、と思うと、目の前にある頭を一発くらい引っ叩いても罰が当たらないのでは、と不穏な考えが頭に浮ぶ。

実行に移すかどうか悩んでいると、恭介が話しかけてきた。

「あー……テスト、どうだつた？」
「……ん？ まあ、良い感じかな。恭介は？」
「右に同じ」
「えー、嘘だ」

テストの話題を口火に、私は恭介の隣に並ぶ。そこで、あることに気がついた。

「嘘じやねえし。今回は秘密兵器が一緒だつたんだ。お前にだつて遅れば取らねえ
「あんた、いま身長何センチ？」
「聞けよ」

彼の身長が私のそれに迫っている、そのことに初めて気がついた。小学生のころは私のほう10センチ以上大きかったはずなのに、今ではその差がかなり縮まっている。その事実を意識した瞬間、消え

たはずの摩擦が僅かに息を吹き返す。

「つたく……確か153だつたはず」

「……それつて、いつの数字?」

「え、四円のだけど」

「バカ?」

「な、なんでだよー」

「あんた、明らかに臂え伸びてるじゃん」

「は? マジで?」

現在の私の身長は164センチだ。去年の春からほとんど臂は伸びておらず、その年の夏には成長痛も治まっている。そんな私と恭介の現在の身長差は、おそらく5センチもない。そのことによく恭介も気がついたのか、心なしか、彼の瞳に嬉しそうな色が灯る。なんとなく、面白くなかった。

「なにや。手力なることが、そんなに嬉しいわけ?」

「え、ああ、そりゃもちろん。つか、お前がふつた話題だろ。なのに、なんでお前が不機嫌なんだよ」

「べつにー? で、要件は何なの? いっちは折角の半ドンに居残りなんてさせられて、早く帰りたいんだけど」

「……お前、さつきから話の舵取り、滅茶苦茶だぞ?」

「あんたのせこよ。まだひこじい世間話でお茶を濁さうつて魂胆が見え見えなのよ」

私の指摘に、恭介が黙り込んだ。ついでに足も止まった。その様子を見て、少し言い過ぎたかな、と自省する。どうも感情の統率が上手くできていないようだ。

彼が足を止めたせいで、数歩前に進んでいた私は、振り返って彼の顔を覗き見る。そして、すぐに後悔した。

「歩きながら話す」

言ひやいなや、恭介は歩き出した。私も彼の後ろに着いて歩く。先ほどの焼き直しのような立ち位置だった。しかし、二人の間にある空気はまるで異なっていた。その違いが胸の中に摩擦を蘇らせ、心臓を見えないヤスリで擦られているような痛みを生んだ。

方角からして、生徒玄関に向かっていることはすでに分かっている。恭介は何も言わず、廊下を歩き続ける。私たちの不揃いな足音が廊下を鳴らすたび、胸の中で不安が風船のように膨らんでいく。このまま黙つていたら、いずれ破裂してしまうのでは、と思つたけれど、こちらから口を開くことは憚られた。

不意に、恭介が足を止める。

「あのむ」

恭介が振り返り、私と向かい合ひカタチをとつた。その瞳は静かな光を携えている。私は無意識に身体を強張らせ、彼の言葉に身構えた。

「いつこの、 もつやめにしないか？」

「え？」

彼の言葉を上手く咀嚼できず、口から疑問の声が漏れた。

恭介は頭を搔きながら、言ひづらそうにしている。その姿は自分の行為に気がとがめているように映つた。

「このこの、なにそれ？」
「だから……このこのふつて、話す」と

「この少年は何を言つてゐるのだらう？、

疑問を声に変換より早く、恭介が言葉を重ねていく。

「なんつうか、あの、誤解されたくないつうか」

「はあ！？」

思つたより、ずっと大きな声が出た。恭介のバカ発言によつて、私の身体は一気に脱力してしまつた。次に、過剰に身構えていた自分がバカバカしく思えてきて、頭を抱えたくなつた。
私は溜息を堪えることなく、大きく吐き出すと、彼に視線を合わせる。

「あんたさあ。こまわり、なに言つてんの？」

「…………」

「誰に冷やかされたのか知らないけど、そんなの適当に流しとけばいいじゃん」

なんで、こんな当たり前なことを説明しているのだらう。正直なところ、言葉にするのも億劫だ。しかし、恭介は納得しなかつた。

「そういうのじや、ねえんだよ」

「なら、どうこう」とよへ、

普段の彼らしくない、ボソボソと物言いをつける恭介に、私は問いかける。しかし、彼は口をつぐみ、俯いてしまつた。ただ、その顔は明らかに何か言いたげな色をしている。それを見て、私は苛立ちを覚えた。

「なにや、言いたい」とがあるんでしょ？　言になよ、ほり、ちやんと聞いてあげるから」

「　　つー」

刹那、恭介の瞳に怒りの感情を垣間見た。先ほどまでのじやれ合いとは明らかに毛色が違つ、彼の本氣の怒りだつた。向けられた怒気に心臓が跳びはね、私は首をすくめる。しかし、彼はそれを私にぶつけるでもなく、感情を振り払うように頭を振つた。

私は早鐘を打つ心臓を胸に感じながら、恐る恐る恭介の様子をうかがう。彼はまるで重労働でもするかのように、口を開いた。

「もういい。悪かった」

「あ……うん」

「…………」

「…………」

「……じゃなくて、ええと、ごめん。私も調子に乗つてた」

彼は何も言わず、少しだけ微笑んだ。許してくれた、のだろうか？
私たち以外は無人の廊下に、沈黙が流れる。あまり長居したくな
い空気だが、私は恭介の心情が気になつて、話しかけることができ
ずにいる。

「あのさ、柊」

先に沈黙を破つたのは恭介だつた。

「その、理由があるんだ。ちゃんとした理由があつて、その」

「私と、距離を取りたい理由？」

「え？ ああ、まあ。いや、距離を取るつていうか、距離感が大事
つていうか」

「……話しかけるなつてこと？」

声が震えていた。そのことに私自身が驚いてしまつた。それは恭

介も同じように、目を丸くしてこちらを見ている。私は顔に熱が灯り、慌てて取り繕おうとした。しかし、また声が震えてしまいそうな気がして、結局、何も言えなくなってしまった。

恭介がバツの悪そうな顔をして、頭を搔く。その仕草を見ていると、焦りが秒刻みで膨らんでき、比例するように頭の中が搔き乱されていく。

「あの、違う、別に普通に話す分にはいいってことだ、あの……ああもう！ なんだこれ、俺がすげえ自意識過剰みたいじゃねえかっ！」

恭介の怒鳴り声に反応するように、私の喉から、小さく短い悲鳴が漏れてしまった。咄嗟に口を押さえるも、すでに恭介の耳に入つた後だった。

「いや、終を怒ったわけじゃなくて、その……」

大丈夫、分かつてるから。そう言いたいのに、どうしてか、その言葉は口の中で胡坐をかいたまま出てこなかつた。

お互いの気持ちが錯綜している。それに気がついているのに、何もできなかつた。

「恭介君？」

その時、まるで快刀乱麻を断つかのように、第三者の声が響いた。声の主は恭介の後ろ、つまりは生徒玄関のほうから近づいてきた。その姿を見た途端、私の頭の中に、花という言葉が浮かんだ。

落ち着いた雰囲気を纏い、処女雪を連想させる白い肌の上に、柔らかな微笑を咲かせながら、彼女は私たちに話しかけてきた。

「どうしたの？ なんか大きい声出してたけど」

「……小野寺さん？」

「あ、どうも」

この状況への闖入者、小野寺春香は私に向かって、ぺこりとお辞儀をした。私も釣られて頭を下げてしまつた。

「春香、帰つたんじやなかつたのか？」

恭介が彼女に声を掛けた。ん？ 一人は知り合い？ 小野寺さんはクラスが違うので、音楽などの合同授業以外では一緒になることはなかつたはずなのに。といつか、いまこいつ、ファーストネームで呼ばなかつた？

「うん、そうじようと思つたんだけど、やつぱり恭介君と帰つたと思つて」

小野寺さんは、頬を夕陽のように染めながら、そう言つた。彼女の綻びかけの微笑は、はにかんだ笑顔へと咲き誇つていた。
そして、すべてを理解した。

(……ああ、なんだ。そつだつたんだ)

恭介の不可解な態度、不可解な提案、そのすべてが繋がつた。

彼を見つめる彼女の姿。

彼女に語りかける彼の声色。

それで十分だった。

その後のことは詳しく述べていない。覚えていないが、確かにこ
とは三つある。

一つ目は、あの後、恭介と一緒に下校しなかったこと。
二つ目は、結局、地獄突きを出せなかつたこと。
そして三つ目は……この日を境に、私が擬態を始めたことだ。

02 いつして立花柊は擬態した～運命の日まで、あと一週
間（前編）～

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0836y/>

右手から雷を出そうとしたら異世界にトリップした

2011年12月31日21時45分発行